雷王の子

池間たくみ

ある日のこと。曇り空に覆われていた一つの国に、巨大な雷鳴が轟いた。上空の黒々とした雲は鋭い光に裂かれ、夜のように暗かった街は突然、昼となった。次の瞬間には、大地を揺るがす程の轟音と振動が成響いた。その音量は凄まじく、隣国まで音が聴こえ、残響が長い間鳴りやまなかった。

この雷では幸いにも犠牲者は出なかった。しかし、それよりも驚くべきことがあった。この国に響いた雷鳴によって、この国が続けていた戦争が終戦したのだ。それ以来、あの日の雷鳴は平和のイメージとして人々の心に刻まれたのだった。なぜ雷が戦争を終わらせたのか？　かつての戦争を体験した兵士たちはこう語る。

「雷王が雷を呼んでくれた。雷鳴と、彼の生き様が、俺たちの魂を動かしてくれたんだよ」

雨が降り続けていた。窓を開けっ放しにしていた為か、風雨で中にも水滴が入ってくる。ライトが外を見ると、雲が境界もない程立

ち込めていた。ライトはそっと、窓を閉めた。

「それ、普通に迷惑なんだよ。やめてくれよ」

後ろから声が聞こえ、ライトは振り返る。先程出番を終えたバンドが、メンバーとひそひそと喋っていた。少しにらむと彼らは怯(ひる)んだのか、さらに小さな声で「機材に雨水がかかるんだよ……」とぼやいた。

文句でもあるのか、とライトは抗議(こうぎ)したくなる。もう一回睨(にら)むと、そのバンドはそそくさと逃げていった。雨の音だけが残った。

「怒られちまったな」

気がつくと、横にはバンドメンバーのボルトが立っていた。彼はライトのバンドでドラムを担当している。そして、父の友達だった。

「まあそりゃあ、アンプ置いてる横で雨入れてりゃ、苦情もくるわな」

ボルトは豪快(ごうかい)に笑った。笑い声につられて、ライトの顔も少し綻ぶ。

「父さんの遺言(ゆいごん)通り、やってみてるんだ」ライトは言う。

「うんうん、分かっているぞ」とボルトが続けた。

「お前の親父、本当に凄かったんだぜ」

ボルトのその言葉を聞くたび、ライトは頭に重いものがのしかかるように感じる。

「それ、何度も聞いたよ」とあしらいつつ、静かにため息をついた。そして、父の事を思い出す。ライトの父親のシデンは、この国で最も名高いギタリストだった。ボルトをはじめとする友人たちと共に、国全体に音楽を広めた偉人だった。そしてシデンは「雷王伝説」を生み出した英雄でもあった。この国は、昔から隣国と領土争いで揉めており、とうとう大きな戦争へと悪化してしまった。犠牲も被害も増加の一途を辿る中、シデン達は楽器を担いで激戦区へと向かった。銃弾飛び交う戦場の中、シデン達はなんとソロライブを始めたのだ。穴だらけの地面に乱雑にスピーカーや機材を置き、自分達の曲を演奏し始めた。やがて、空は雲に覆われ、大雨が戦場を包ん

だ。そしてシデンは、両軍の兵士たちに叫んだ。

「敵を殺す前に、俺達の曲を聴け！音楽はあらゆる壁を越えて、お前らの心をひらいてくれる！今は壁を捨てて、自然と繋がって、心をひらいて、考えてみてくれ！！」

そしてその瞬間、鬱屈（うっくつ）とした雲が突然光り、轟音（ごうおん）と揺れが戦場を包んだ。シデンたちの方向に巨大な稲妻（いなずま）が衝突（しょうとつ）する所を、兵士達は狼狽（ろうばい）しながら目撃した。雷は地面すらも叩き割り、穴だらけの大地には広いヒビが入った。漂う煙の中、兵士達が見たのは、黒焦げになりながらも演奏をやりきった、シデンの姿だった。その双眸（そうぼう）は、ただ真っ直ぐに正面を向いていた。その後、シデンの演奏と雷鳴（らいめい）に心動かされた兵士達は国上層部に抗議した。

「シデンの演奏は天に届いた。あの雷鳴は、天からの警告（けいこく）だ」と。

圧力に耐えきれなくなった上層部は停戦を宣言した。かくして平和が訪れたが、落雷

の後遺症によってシデンは亡くなってしまった。彼の死は、国全体に衝撃と悲しみを与えた。住民達は、音楽を広め、戦を止めてくれた男に感謝を捧げた。

「心をひらけ。自然のように強く純粋な想いで演奏すれば、願いは必ず届く」

シデンは死の間際、ライトにそう伝えた。その日からライトは、父に並ぶギタリストになる夢を持ったのだった。父に並ぶ為には、父の遺言に倣おうとライトは考えた。心をひらくこと、自然のように強く純粋になる事、ライトはそれを自分に取り入れるべく、まずは「自然」そのものに触れてみようとしていた。ライブの前に雨をずっと見ていたのもそれが理由だった。しかしライトはいつまでも、父に並ぶことができなかった。シデン達が音楽を広めた影響で、国全体に様々なロックバンドが生まれ、ライトはその中でもひときわ霞んでしまう存在だったのだ。どれだけ演奏しても客は集まらず、父の曲を演奏すれば

「名曲を下手なギターで汚すな」とヤジを飛ばされる事もあった。そして今日の舞台もまともに見る人もおらず、ライト達は静かに帰り支度をしていた。そしてこの日が、ライトの音楽人生、最後の日となった。

「きっと、今の公演が最後だったな」

帰り際、ボルトがぽつりと呟いた。ライトは思わず驚愕し、反射的に「え？　なんで？」と尋ねる。

「さっき速報が出た。東の敵国（てきこく）が侵攻を開始したようだ。また戦争が始まるぜ」

「は……嘘だろ……？」

その言葉を、ライトは信じられなかった。震える手はギターケースを離してしまい、ケースは地面に転がる。

「本当だ。国は若者の徴兵準備（ちょうへいじゅんび）を始めるそうだ。逃げようとしてもすぐ捕まるぜ」

シデンの伝説は何だったのかねぇ、とボルトは肩を落として帰っていった。ライトは、動くことができなかった。自分の音楽人生が

こんな一瞬で終わってしまった。まだ夢が残っているのに。ライトは下を向き、水たまりに涙を落した。雨は勢いを増し、激しく傘を打ち付けていた。一ヶ月後、ライトは国の軍部隊に配属(はいぞく)された。ギターではなく銃を構え、演奏はせずに戦地を走り回っていた。幸い人を殺す事はまだなかったが、音楽ができず、過酷(かこく)な戦地で生きる事は、ライトの心に大きな穴を空けていた。顔からは表情が消え、目の下にはクマがたまるようになった。

「君、シデンさんの息子だろ」

ある日、ライトを呼び止める声があった。振り向くと、髭(ひげ)を蓄えた一人の兵士が立っていた。聞けば、この兵士はかつて隣国との戦争を体験した人物であり、シデンの最後の演奏を目撃(もくげき)していた人間の一人であったそうだ。死になくないと怯(おび)えながら生きていた矢先、シデンの演奏で心を動かされ、思わず涙を流したのだという。

「君も、音楽をやっているのかい」

兵士のその言葉に、ライトは「ええ、まあ…」と小さく答えた。

「でも」とライトは言葉を繋げる。

「俺は、父の遺(のこ)した言葉通りに音楽を続け、いつか父に並びたいと思っていました。でも、だめだった。どれだけ努力しても、父には追いつけなかった。父と比べられて、ヤジを飛ばされる事もあった。そしたら戦争が始まって、一瞬で音楽人生が終わってしまった。俺は多分、この戦いで死ぬと思います。もう音楽はできません」

ライトの足元の地面には涙で濡れた跡が広がっていた。やがてぽつぽつと雨が降り始めた。俯くだけのライトに、兵士は静かに傘を預けた。

「ライト君、シデンの遺言を教えてくれないか」

突然の要望(ようぼう)にライトは驚いたが、すぐに遺言を伝えた。兵士は、黙って聞いていた。

「そうか。心をひらき、自然のように強く純

粋……か」兵士は顔を綻ばせた。

「いい言葉じゃないか」

「でも、どうしたらいいか、結局あまり分からなくて……」とライトは続ける。

少しの沈黙の後、兵士は再び口を開く。

「ライト君は、また音楽をやりたいかい」

ライトは少しだけ顔を上げる。

「ええ、叶うならまた音楽をしたいです。だからこの戦争も早く終わって欲しい」

「だったら、今から終わらせに行こう」

「え？」ライトは一気に顔を上げる。

「シデンがやった通りだ。君の音楽で戦地を揺るがし、兵士の心を変えに行こう。君のその戦争が終わって欲しいというのは、何の淀みもない自然な気持ちだ。君の一つの強い気持ちを、ただ一方向にぶつける。それが心をひらく事なのかもしれないぜ」

兵士のその言葉は、ライトの表情を変えた。彼の言葉が、父の遺言（ゆいごん）の真意（しんい）に近い気がしたのだ。

「何で……そう言い切れるんですか」

思わずそう尋ねていた。兵士は笑ってそれに返す。

「かつて見た君のお父さんが、俺たちにぶつけてきたんだ。たったひとつの、強い気持ちをな」

暫くして、ライトはボルトに話を通し、敵の野営地へと向かった。着いた瞬間に兵士達が銃を向けてきたが「敵意はない。少し、音楽を聴いてほしい」と真摯に伝えると、兵士も銃を下した。

そしてライト達は、雨の降る中、演奏を開始した。最初は兵士たちも黙って聞いていたが、雨が激しくなると「もう止めろ」「撃つぞ」とヤジを飛ばしてきた。

しかしライトは「ちょっと待てよ！」と叫ぶ。マイクに口を近付け、語り始めた。

「俺はこの戦争で、夢を諦めた。楽しかった音楽を諦めた。俺は、もう一度音楽がしたいんだ。頼むから、俺の演奏を聞いてくれ。俺

のたった一つの思いを、受け取ってくれ！！」

すると瞬間（しゅんかん）、轟音（ごうおん）が鳴り響き、閃光（せんこう）が大地を切り裂いた。再び戦地を、巨大な雷鳴（らいめい）が打ち抜いたのだ。落ちた先は、ライト達のすぐ後ろだった。兵士たちがどよめき「俺たちは天を怒らせちまった」「退却（たいきゃく）だ！休戦だ」と叫んだ。

髭の兵士は、それを遠くから見ていた。

「しっかりとぶつけられたな。雷王の子よ。誇れ。君は父に並んだ」

その後、ライトは一気に名前を上げ、国で最も有名なギタリストとなったのだった。